



卓 話



「書に会う」

書道家

小畑 延子氏

今年の1月で66才に成りました。私の最初の運命的な出来事は、5才の時に両手切断という事故に遭った事です。



鉄工所等の町工場が多い神戸長田区で生まれ、父も小さな鉄工所を営んでおりました。真向いの家は製材所で、その娘さんと遊んでいた時に機械の間を通り抜けようとして事故に遭ってしまいました。

7ヶ月後に地元の小学校に入学しました。入学に備え、名前だけでも書けるようにと義手を付けさせられ、炬燵の上で練習した事を覚えています。勉強の時は義手を付け、遊ぶ時は外す生活が面倒になった私は、義手を付けずに両腕に鉛筆を持つ方法に切替えました。

事故後に話しを戻しますが、退院後に母に食事を食べさせて貰う事が苦痛になって、腕にゴムを結び、そこにスプーンや箸を挟んで、自分で食べたいとねだりました。指のない両腕に箸を挟んで食べるというスタイルは、今の私の日常生活の原点です。義手という道具を外した身軽さは、私から不自由という言葉をしつづ取り除いてくれました。

急に両手を失った悲壮感もなく、毎日楽しく学校生活を過しておりました。勉強は出来ないが明るく活き活きしている私に、何か身に付く事をさせてやりたいとの担任の先生の発案で、水彩画教室に通う事になりました。途方にくれていた両親は単純にも「娘は画家になる」と夢を持った為、嫌々教室に通っておりましたが、中学に入ると書道塾を勧められました。重度の障害を持つ者の高校進学は厳しい

時代でしたが、無事希望校に進学し、その3年後の受験では、少ない選択肢の中から第1志望を国立大学の教育書道科、第2志望に公立の社会事業短大を選び、結果は短大に決まりました。卒業後は紆余曲折の後、45才迄の22年間を民間の里親開拓機関のソーシャルワーカーとして勤務しました。

何気なく書道が続けていた私が「書」を強く意識した時があります。短大卒業後に就職して1年で挫折し、就職浪人をしていた2年間です。書の公募展への出品を勧められて先生の手本を猛烈に書き写していた時期で、結果として賞をもらった時は愉えようもなく嬉しかったです。これは2年後の日展初入選よりも喜びは大きかったです。初入選はマスコミにも大きく取り上げられて困惑した事もあり、むしろ重たく感じられました。しかし障害をもっているというだけで蔑視していた人の視線が温くなるという、皮肉な現象も起こりました。書と仕事は全く別世界のものですが、日展入選は結果として社会で働く事を後押ししてくれたのでした。

45才で二足のわらじの一方を脱ぎ、生まれ育った神戸を離れ、東京で画家の宇野マサシとの生活が始まり、書も続けました。有名な句や詩歌を素材に、構成、文字の形に苦慮している私に、ある時宇野は人の作った素材を技術でかく書は人の心を打たないといったのです。直ぐには出来ませんでした。日常の生活から生まれた言葉を徐々に書に表現していきました。そして私の言葉の書を見た画商が個展をやろうと言ってくれました。画商による企画展は書が商品となる怖い事ですが、挑戦してみようと思いました。挑戦し続けて11年ですが、以前は傍らにあった書を今はこの両腕に掴もうと思うようになりました。

私だけに与えられた運命だから「私にしかかけない書」を目指していますが、深海の魚のように捉えがたくもあり、何時の日か手を伸ばせば届くこともあるような、紺碧の空にも思えるのです。